
教育総合センター だより

NO. 122

平成 23. 12. 1

「母語教育」と「外国語教育」

尼崎市立小田北中学校

校長 尾崎 一郎



グローバル化が進む中、英語が使えることが日本人にも強く求められています。中学・高校と6年間英語を学んでも英語が話せない。社会人になり、仕事で必要になると英会話学校に通わなければならない。等々、従来の英語教育に対する批判から、国は様々な施策を打ち出しています。

平成15年3月には「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」が策定され、それを受けて、英語科教員に対して5年計画で「英語教員の資質向上のための研修」が実施されてきました。新学習指導要領では、小学校においては外国語活動が必修化され、中学校では、来年度から週3時間の英語が週4時間になります。高等学校では「授業は英語で指導することを基本とする」となりました。

果たしてこれらの施策で日本人は飛躍的に英語が使えるようになるのでしょうか。英語教育に30年余り携わってきたものとして、私は少し違う考えをもっています。

多くの日本人にとって、英語ができないことによる日常生活の中での不都合はほとんどないのです。日本は、幸いなことに母語で高等教育が受けられ、母語だけで豊かな社会生活が営める数少ない先進国の一つなのです。一方、多くの日本人が、国際化する社会の中でもっと英語が使えなければならないと考えているのも事実です。しかし、アジアやアフリカの発展途上国の人々のように、英語ができないと高等教育が受けられなかったり、安定した職業につけな

いのは大きく事情が異なるのです。

世界では、英米人のように英語を第1言語としている人々よりも、第2言語として英語を使いこなしている人の方が多くなっています。今や英語が国際社会での共通語となっているのは周知の事実で、英語が使えるようになることはとても大切なことです。

しかし、もっと大切なことは、英語を使って世界の人を相手に何を伝えるかです。母語を使って伝える中身がないのであれば、外国語を使って自分を主張できません。物事をしっかりと考え、自分の意見をはっきり述べる。相手の意見をしっかりと聞くことができる。これらの力は母語で培われるものです。母語の力が充分でないと外国語の力は伸びません。多くの日本人に望まれている英語の力は、グローバル化が進む世界の中で、他の国の人々と英語を介してコミュニケーションできる力を培うことではないでしょうか。英国人や米国人と同じ英語力が求められているわけではありません。そのためには、もっと母語教育に力を入れるべきだと思います。

母語教育は、国語の時間だけにお任せするものではありません。私たち教師が、教科や道徳・特活の時間のみならず、子どもたちと接するあらゆる場面で育てていくものではないでしょうか。母語教育の成果があがれば『英語が使える日本人』は着実に増えていくと思います。

花～すべての人の心に花を～

I君と初めて出会ったのは、入学説明会の2月の寒い日だった。ヘッドギアをつけ、肩から口をぬぐうタオルをかけ、両手で杖をつきながら、おぼつかない足取りで歩くI君。そんなI君との二年間の学校生活は、私にとって教育の営みを根っこから問い直された時間であり、かけがえのない人生の宝物となった。

誕生を心から待ち望んだご両親に医師からの宣告は、痛烈だった。仮死状態で生まれ、「脳性小児まひ」と告げられ、「命の保障はできません」と。ご両親は毎日、泣きあかし、「このまま死んだ方がいいのでは」と考えたそうである。彼のかぼそい泣き声、でも懸命に生きる姿に、しだいしだいに二人は授かった命、限りある命を精一杯応援しようと心に刻んだのだと。下校時、彼を送って行った玄関先で淡々と語るお母さんの話、私は何も答えようがなかった。

高学年担任が多かった私にとって、一年生の学級担任は、悪戦苦闘の連続だった。言葉が通じない、指示が徹底しない。本当に八チヤメチャな毎日だった。給食、清掃、家庭訪問、文字指導、数の勉強・・・今、思い出しても冷や汗ものである。また、彼へのかかりっきりの対応。正直、I君が休むとほっとしたものである。それもつかの間、無性に寂しさが募ってきたことをよく覚えている。おかしなものである。はじめ、遠巻きにしていた子どもたちも、ごくごく自然に彼と戯れだした。なんの違和感もないように、泣いたり、わめいたり、けんかをしたり。

水泳中に友だちとふざけ水を飲みこみ、プールの底に沈みあわてふためいたこと。「ドラえもん体操」の曲で彼と踊った運動会。アルカイクホールでの市の音楽会・・・。

春夏秋冬、杖をつきながら登下校する彼の周りは、いつしか仲間が寄り添っていた。長い年月を経た今もあの日、あの時のことが鮮やかに蘇ってくる。無論、いいことばかりではなかったが、彼の周りにはいつも、仲間がいて、温かい眼差しで見つめてくれる人たちがいた。

今、手元に残っているのは、「サッカー選手になりたい」と書かれたI君の詩。二年生時、「生い立ち」の授業のビデオテープに映る、ちょっと気取った30年前の私と彼と二年一組の仲間たちの映像だけである。彼の近況も年賀状で知るだけになってしまった。彼ばかりではない、地区の子、在日の子、様々な背景を抱えた子どもたちが、私の前を通り過ぎ社会の荒波に駆け出していった。

はたして、彼らはどのような人生を送っているのだろう。私は彼らの生きる術の一助になり得たのか。3月11日の東日本大震災による風評被害、被災地、避難者への心ない対応など、薄っぺらな私たちの社会を見るにつけ、彼らの生きざまに想いが巡る。真っ白なキャンパスにつぼみだった子どもたちは、花を咲かせているだろうか。色とりどりの人生の花を咲かせているだろうか。

沖縄の奏者、喜納昌吉は唄う

川は流れて どこどこ行くの

人も流れて どこどこ行くの

そんな流れが つくころには

花として 花として 咲かせてあげたい

泣きなさい 笑いなさい

いつの日にか いつの日にか

花を咲かそうよ



(人権教育推進担当 松岡 洋)

<元園和北小学校長>

教育相談研究部会に参加して

～新しい交流の場～

本年度、教育相談研究部会6名の一員として4月から教育相談の研究に携わっています。6名の研究員の構成は、私を含めた4名の小学校教諭に、2名の中学校教諭です。偶然にも小学校は4名とも5年生担任とあって、児童の発達段階が同じなので共有できることが多いだろうと期待が膨らみました。また、中学校現場での生の声は聞けそうでなかなか縁遠いので、そうした楽しみもできました。お互いの貴重な意見交流の場として部会をとらえ、教育実践に役立てていきたいと思いました。そう考えることで、研究テーマに沿って研究を進めていくことから得られるものに加えて、この研究部会がより自分にとって有意義なものになることは間違いないと確信しました。そうはいってもまだ、当初は具体的な研究の進め方というのがほとんど見えていなかったのも事実で、不安な気持ちもなかったとは言えません。たった一つ、この研究が現場でのよりよい実践、そして児童の成長につながるものであってほしいと願っていました。

「研究テーマ」とともに

漠然とした不安を持った一つの要因として、「教育相談」というカテゴリーがこれまでの自分のどの実践にあてはまるのか、またこれからのどういった実践につなげていけばいいのかが、自分の中でとても曖昧であったと言えます。それが第1回目の研究部会で研究テーマが決定し、それに沿って自分なりに研究を進めていきたい、と感じたその瞬間から私の研究がスタートしました。今年度の教育相談研究部会の研究テーマは「学級を基盤としたよりよい人間関係作りを目指して」です。

「研究テーマ」にせまる

研究テーマにある2つの大きなキーワードは、「学級」と「人間関係」です。「学級」の中で児童生徒がよりよい「人間関係」を築き、それが個や集団の成長につながっていくような学級経営のあり方を考え、それにつながる具体的な手立てを見つけていくこと、それこそが研究テーマにせまって研究を進め

ていくということです。これらの内容は、普段学級経営を行う上で、誰



もが考え悩んでいることです。つまりは、これまでの日々の実践そのものが「研究テーマにせまる」ことだったのです。ただ、それらについてより考えを深め、客観的にとらえ、よりよい実践につなげていくために、部会で意見交流をすることは、今、大きな励みとなり収穫となっていると実感しています。小中での共通点もアンケートなどを実施する中で見えてきました。その中で出てきた重要なキーワードは「自尊感情」でした。

「自尊感情」を育てる

よりよい人間関係を築くための基盤として、まずは自分に自信を持ち自分を肯定的にとらえる「自尊感情」を必要不可欠なものとしてとらえました。しかし、学級の子もたちが驚くほど持っていないのが現状でした。細かい分析はここでは省略しますが、自分を好きでないのに、人と積極的に関わることに無理があるのは当然のことのような気がします。

私は、自尊感情を育てる第一歩として、「学級会」での全員参加の話合い活動を行い、全員で学級をよりよくしていこうという意識を高めさせ、一人一人が学級の中の大事な一員であるという気持ちを持たせることにしました。

また、友だちのいいところさがしをする活動を実践し、気づいていなかった自分自身や友だちの良さを発見することで自尊感情を高める取り組みを部会共通の課題として行っています。

これらの実践を通して、子どもたちが自分を肯定的にとらえるようになるとともに、私自身も研究をより深めていくことができたから幸せです。

(武庫の里小学校教諭 磯野 明子)

教育情報コーナーへどうぞ

教育情報コーナーでは、先生方に利用していただきたい本や資料、雑誌等を整備しています。教育総合センターでの研修や会議のときなど、ぜひお気軽にお立ち寄りください。今回は、人権週間（12月4日～10日）に関連した本を紹介します。

（情報コーナー担当・幾田）

『学校が元気になるファシリテーター入門講座～15日で学ぶスキルとマインド』 ちよん せいこ / 編著 解放出版社

ファシリテーションは異なる立場の利害対立が起こるような場面で、良好なコミュニケーションを育みながら、共通のルールをつくるのが、うまくなるスキルです。教職員が連携しチーム力を高める学校経営、また子どもたちの育ちや成長を支える学級経営。

この2つに有効に働くファシリテーションのスキルを提案しています。著者の提唱しているホワイトボード・ミーティングは、現場ですぐに使いそうです。

『ダイバーシティ・トレーニング・ブック～多様性研修のてびき』

森田 ゆり / 編著 解放出版社

ダイバーシティ（多様性）とは「多様な人々が互いの違いを尊重し共に生きる社会」の理念を表す言葉です。今この考え方は、人権理解のためだけでなく、人材開発やマネジメント・トレーニングまた経営戦略において、最も注目された概念の1つです。

本書では企業や行政、地域や学校で実際に活用できるように、それぞれの研修のねらい、目的にそった進行の仕方がていねいに示されています。

『シチズン・リテラシー～社会をよりよくするために私たちにできること』

鈴木 崇弘 [他] / 編著 小学館

日本は、政治や政策、法律などが、なかなか身近なもの、自分の生活と密着したものであると感じられない社会です。それは社会や民主主義のあり方、そこにおける市民の役割などについて、現実をふまえながらその基本的かつ根本的なことを具体的に学んだり、考えたりする機会が日本にはないからではないでしょうか。つまり、「市民が市民であるために」必要とされる素養やスキル（シチズン・リテラシー）を習得する機会がないからではないかということです。（あとがきより）

本書では、市民が社会に参加し、社会をよりよくしていくための考え方や方法をわかりやすく示しています。

